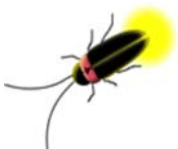


たった二度のちがいで

高知 六年 ゆかり



「姉ちゃん、早うしてやあー!」

家の戸口から弟の裕太の呼び声が聞こえた。私はテレビの横にあった小さな黒いかい中電灯とカメラを取りながら、

「はいはい。今行くわえ。」
と答えた。

私の家の前と後ろには、通常かまちと呼ばれている、はばが約一、五メートルぐらいの大きな溝がある。特に前のかまちは、木の歩道があるし、アジサイの木もあって、何よりも初夏に螢がたくさん飛ぶ。二年前からは、大勢の人が見に来るようになった。家が近いから、私の家族は毎年螢を見に行く。

今年も、今週の月曜日から螢を見に行き始めた。夜の気温は、月曜日は十七度、火曜日は十四度だった。月曜も火曜も四匹ずつ見つけた。その日は気温は十二度で、外に出ると少し冷たい南風がふいていた。お母さんと妹と弟は、

「先行くで。早よう来いよー!」
とさっさと先に進んでしまっていた。

私は、ところどころ立ち止まりながら、アジサイやススキや雑草のしげみの間をよーく見た。でも、ところどころに空きビンや空きカンが光っているのに、どうしても螢の黄色い光が見えなかった。風が正面に当たるので、目はかわくし手すりに鳥がふんをしているので体をもたせられない。私は、目をこすりながら

「やっぱりあちゃんらあみたいにするどく見つけられんか……。」
と独り言を言った。

しばらくすると、
「姉ちゃん、おった〜?」

と弟の大きな声があった。私は、
(大声を出すと、なんぼ田んぼの中でも近所の人に迷惑がかかるかもしれない。)

と思いながら、手で大きく『バツ×』をした。電灯の光で弟がうなずくのが見えた。

このあと私は、蛍を探しながら時々立ち止まって、草むらのをぞいた。でも、光るのはゴミばかりだった。いくらさがしても蛍はいなかった。

国道への入り口の所まで行くと近くの外灯の光で、犬の散歩をしている頭のハゲたおじさんがいた。私は、

（あっ、あの頭は、桂月のおじちゃんや！）

と思って、わきのおげ道を土をふまないように気をつけながら走って行った。

桂月のおじさんは、『桂月』という地酒の会社の社長さんで、いつも優しくておもしろくて自然のことにくわしい。私が近づくと、犬がすりよってきた。桂月のおじさんは、

「今日は一つもおらんねえ。さむいきやろうかね。今年は去年からいうて二週間、おと年からいうて一週間はおそいがよ。」

と言った。私が、

「へえ、よくそんなことわかるねえ。」

とほめると、

「まあ、いっつも蛍の手帳に付けちゅうもんね。」

と答えた。私は、

（はあ。たった二度のちがいで出てこんなんてさ……。かい中電灯ででかくピカピカして電池むだにするより、いっその事おじちゃんの頭のテカテカで蛍がきたらえいにな……。）

と思いながら、

「蛍とか敏感やけやろうかね？」

と言った。おんちゃんは、

「ちゃうちゃう。人間がドン感ながよね。」

とわらって言った。私は、さっきまで何度も見た空きビンや空きカンやゴミを思い浮かべた。

私は、

「あっそうか、なるほどね。でもはよう蛍出てきたらえいにね。」

と言った。おじさんは、

「大丈夫。あと一週間もしよったらいっぱい乱舞しだすき。」

と言ってわらった。

また風がふいた。

（指導 坂田次男）